

禮式所感

泉鏡

花作

明治二十八年五月

「物申」  
ものまをし

「どうれ」

と取次に、出でたる者に導かれて、縁を過ぎり  
て座敷に通じ、席に直りて煙草盆を、前にひかへて  
待つ處へ、主人が出で、挨拶すると、唯これだけの  
間にも、條件を分けて記する時は、随分多數の禮法  
あり。法といへば彼我の間に一個確然たる規約あり  
て、犯すべからざるやうなれども、昔は知らず、當  
節は、禮に法といふは殆ど無きに近しと思はる。

舊幕の時代とても、別に尊卑の禮に對する、掟と  
いふものなかりしが、暗々裡に一種の規律は、上下  
の間に、成立ち居れり。譬へば殿様御通に下に居ら  
うと警めても、のつそりと突立つ者は、曲事たるべ  
き定あれば、いかなる者も屈從して土下座をせざる

はなかりしならむ。さるからに尊卑の階段、貴賤の階級、甚しき相違ありて、禮式もまた目今より、大に見るべきものありし。これ禮に對するに法を以てしたりし故なり。今は然らず、貴人高位の面前にても、野人禮に倣はずして、随分通通る世の中なれば、坐るよりも胡坐がよく、胡坐よりも寢轉びて、談話をするが氣樂なるゆゑ、「お平に入らつしやい。」を、客の方より請求して、「何うです皆樂に居ちやあ、請ふ拙よりはじめます。」と膝を崩して洒然たり。もしそれ、時と場合に因りては、玄關より横になりてころがり込むとも、さきの主人が、極めて懇意なる者ならば、これを咎めすまじきなれど、其家の家族等は、慊焉たるものなからむや。社會は個人的のものにあらず、家ある處、川ある處、山ある處、野ある處、我より他に多くの目と、耳あるものと知らざるべからず。肅然、泰然、儼然など威嚴的の文字をもて形容さるべき人ならば、其采も最床し。技藝、文學何に寄らず、一方に擢んでたる、名人妙手といはるゝ人、はたまた英雄豪傑と、竹帛に許さるべき、偉大なる人物は、自家特有の禮を存の禮を存して、小笠原百ヶ條の規律以外に超然として、拘束

さるゝ所なくして然も世人に崇拜されむか、そは其人に止まるのみ。むかし諸葛亮孔明は、玄德をして己が庵を、三顧せしめしが豪儀なりとて、區役所の召喚状を、棄てゝ置くのは間違ひなり。特別に斯し  
よう、あゝしようと思はずして、其なす處おのづから禮にも協ひ、式にも合ひ、以てよく人を服せしむるは、これ其人物の到れるにて、普通の者が最初より眞似てなし得る處にあらず。それ萬有は無に似たり。百足が歩むに一から百まで、このあしを斯う出して、それからこれをかうやつてと、一々心に懸けつゝあらば、其亂難なるいふべからず。足あるために一寸も、歩行く事を得ざるや必せり。人の道を行くも又然り。誰か左右、左右と、肚の内に繰返して歩を移すものあらむ。禮に要する處は、儀式ばるにあらずして、起居振舞尋常に（角のとれる）といふにあり。眞の眞の禮をするとして、キツクリ頭を下げ、がつくりと腰を低くし、シャツチコバツて手をつかは、蝦蟆の逆に立ちたるやうにて、其醜きこと禮を知らで、失態を來す者と、殆ど小差なきに似たり。これ格段になさむとする、意思に拘泥さるゝに因る。人生萬事如意なるなし。斯くなさむと思へばとて、

其意そのいの如ごとくはならぬものなり。されば、平生へいせい心に懸かけて、起臥進退きくわしんたいに練習れんしゆせば、要えうある時はおのづと角かどのとれてまる／＼なりたる作法さほうは擧動きよどうに顯あらはるべし。元服げんぶくの前ぜん一日いちじつ俄にはかに習ならへる禮れいを以もて、翌日あくるひ席のせきに臨のぞむとせむか、いかによく其教そのをしへを實地じつちに行おこなひ得えたりとも、宛然さながらやくしや役者やくしやのハ、アハツと、眞四角ましかくなるが如ごとくにて、故わざとらしくて最拙いとつたなし。平生へいせいちやんと心得こころえ居をらば、人ひと教をしへぬに箸はしを取りとて、順序じゆんじよよく、體裁ていさいよく、茶漬ちやつけをさら／＼と嚼するが如ごとくけむ。それも一年いちねん三百餘日さんびやくよにち、毎日まい日練習にちれんしゆしてこそよけれ。人ひとに習ならひてやう／＼に、洋やうし食よくを食たべるが如ごとく、不熟練ふじゆくれんなるものにては、お茶漬ちやつけさら／＼とは行ゆかざるなり。何なにしる禮れいを知らむとならば、これを飯めしを食くふ如ごとくにせよ、急いそぎても鼻はなには入いらず、そろ／＼にても顚あこにつかず、緩急くわんきふ其時そのときに従したがひて、臨機應變りんきおうへん學まなばざるに、其そのよろしきを得う得えるならずや。

つら／＼思おもへばおのが手足てあしを、自由自在じゆうじざいに心こころのまゝ、使つかはむとするの難かたきこと、人ひとを使つかふの此こゝにあらず、起居たちゐの禮れいといへばとて、たか／＼我身わがみを使つかふまでなり。歩あゆめといへば直たゞちに歩あゆみ、とまれとい

へばすぐとまる、起て、すわれ、寢よ、横になれ、  
唯々として雑作なきを、そも／＼何等の必要ありて、  
これを學ぶを要せむやと、思ふは思はざる過失なれ  
ば、練習せよ、熟練せよ、前段既に説けるが如く、  
記して亂雑なる禮法はい これを行ふに簡易なり。